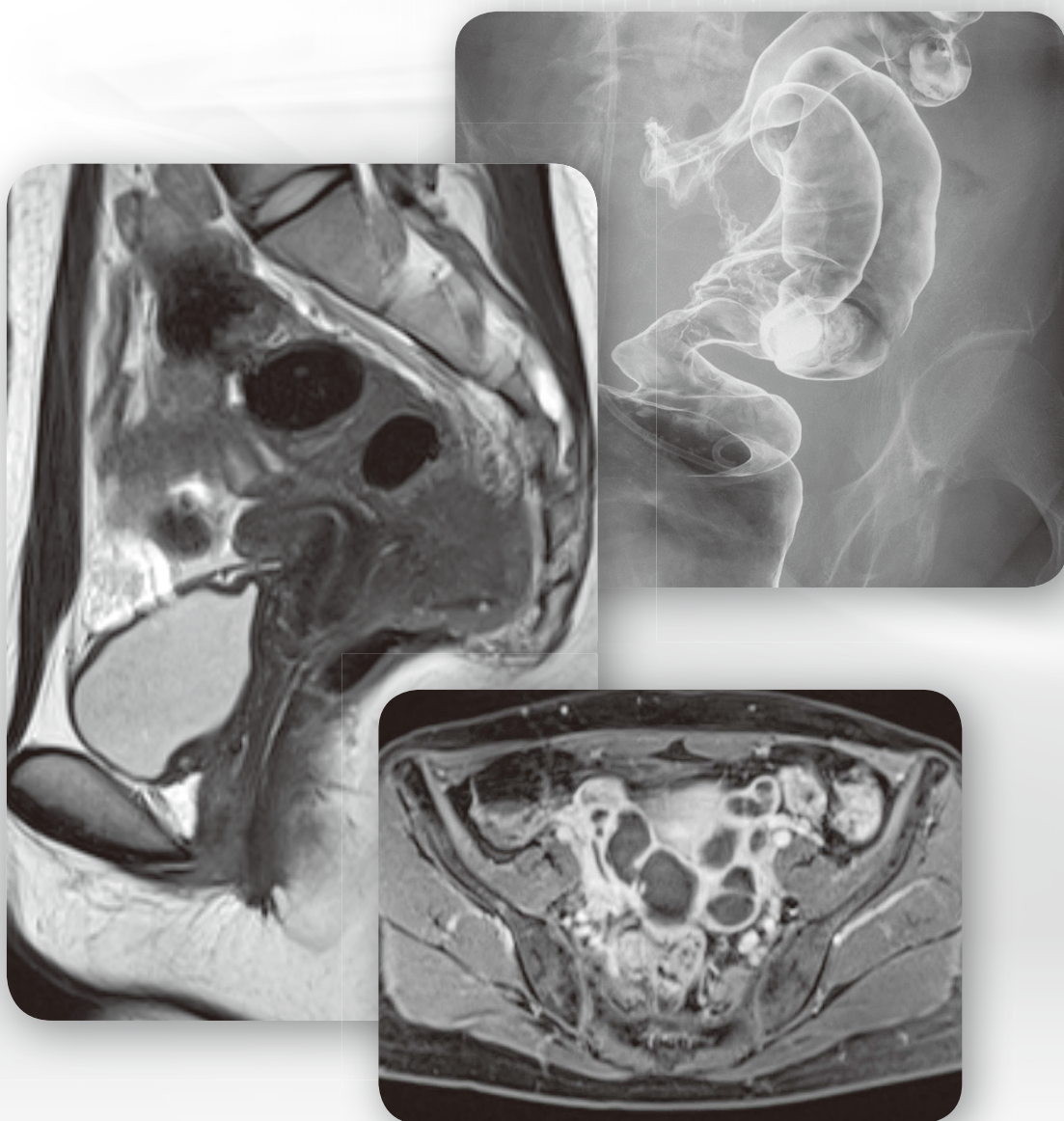


特 集

女性の下腹部痛：



(写真：p415, 425, 433より)

画像診断とIVR

序 説

筆者の勤務する読影室では、腹痛の原因精査は腫瘍関連のCT読影とともに、日常業務の多くを占める。患者が女性であれば所見をチェックすべきポイントが複数存在し、年齢にかかわらず手間かけた読影が必要となる。依頼先が救急や消化器内科・外科であっても症例のなかには婦人科が担当となる子宮卵巢内生殖器由来の病態は一定数存在する。主科の引き継ぎにかかわる点でもあり注意深い読影を心がけている。

今回の特集のテーマは“女性の下腹部痛に関する診断とIVR”である。これは女性下腹部という狭い領域で生じ、多くの病態が想定される疼痛の原因を画像で正しく診断すること、かつ緊急を要する場面においてIVR手技を駆使して治療を完遂すること、この画像診断とIVR治療の二本立ての特集を企画した。

画像診断では、子宮卵巢を由来とする腫瘍性病変が疼痛源となる状態をウッドハムス玲子先生に、骨盤腔の内生殖器由来の感染疾患に関して日野圭子先生らに、急性腹症や発熱疾患ではないが慢性疼痛をきたしうる子宮内膜症に関してMRIを中心に山端康之先生らに解説していただいた。また産科関連を除いて妊産婦で腹痛を起こしうる病態を安座間喜明先生らに、そして内生殖器以外に一般的な下腹部痛の急性腹症の画像所見に関して井上明星先生に解説していただいた。

IVRについては産科出血の対応を近藤浩史先生らに、産科出血以外にIVRの適応となる妊婦の疾患病態を我那覇文清先生に解説していただいた。

IVRの項目ではお2人の先生方がチーム医療に関して言及されている。腹痛症例のなかには一刻も早く治療を開始する必要のある病態があるため、IVR医のみならず読影を担当する医師も、産婦人科医、研修医、消化器内科・外科医と密接なコミュニケーションによる意思の疎通を図る必要がある。今回の特集で皆様の診断技術が研ぎ澄まされ、産婦人科領域のIVR知識の更新に役立てば幸いである。

又吉 隆